永井路子

歴史をさわがせた女たち

庶民篇

文春文庫

文春文庫

歴史をさわがせた女たち　庶民篇

定価はカバーに
表示してあります

1979年5月25日　第1刷
1992年1月10日　第22刷

著　者　永井路子

発行者　豊田健次

発行所　株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3—23　〒102
TEL 03・3265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

印刷・凸版印刷　製本・加藤製本

Printed in Japan
ISBN4-16-720006-6

文春文庫

歴史をさわがせた女たち
庶民篇

永井路子

文藝春秋

目次

＊プロローグ——意外篇
小町は美女だった？　一三
青い眼のニッポン報告　一八
＊しごとの手帖——職業篇
最古の職業——巫女　二五
最多の職業——農婦　二九
貞女物語の裏側　三八
金沢の泣き一揆　四二
紙を漉く女たち　四七
ママという名の乳母　五三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

女乞食皇居へ参入　六四
泣き尼の失敗　六八
本陣のおかみさん　七三
悲しきは飯盛　七七

＊カネの世の中――金銭篇

平安女性の別れのセリフ　八三
がんばりました三子さん　八八
L判の女金貸し　九二
ケチケチ比丘尼　九六
金貸し巫女繁盛記　一〇〇

＊マイホーム今昔――家庭篇

万葉時代の猛烈ママ　一〇七

屍を背負って　一一一
息子の蒸発　一一五
尼寺の素顔　一二〇

＊悪事の蔭に――犯罪篇

天明の構造汚職　一二七
美女はサディスト　一三一
首領は西陣の女　一三七
女体解剖第一号　一四一

＊男と女の風景――愛欲篇

奥さまは力持ち　一四七
ありがたい女房　一五二
新妻の髪型　一五七

乳房の痛み　一六一
夫婦交換の決算書　一六五
一度に男を三人持てば　一六九
恋のベテランの不覚　一七六
家出はしたものの　一八〇
やるぞ中世〝中ピ連〟　一八四
不義密通　一八九
かけこみ寺往来　一九三
もう一つの縁切寺　二〇一
＊埋もれた語り部たち——才女篇
おあんの戦国体験　二〇七
琉歌は語る　二一一
幕末の語り部　二一五

幕末のマダム・メモワール　二二五
近世女大学　二二九
旅をする女たち　二三三
＊エピローグ――古今評論篇
オトコたちの曰く　二四五
おわりに　二五二

本文カット・大内　秀

歴史をさわがせた女たち（庶民篇）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

プロローグ——意外篇

女とは何か？　男ならざる人間の総称だ。いまさらわかりきったことを……とおっしゃるかもしれない。が、われわれは、本当に女についてすべてを知りつくしているのか。とりわけ過去の日本の女性について、これまでまちがったイメージを持ちすぎてはいなかったか。いま、改めて過去の――それもわれわれと同じ立場にあった庶民の女の姿を掘りおこしてみると、意外な事実を発見するのではないだろうか。

小町は美女だった？

「小町」という言葉から、連想されるのは、まず美女のイメージだ。戦後はミス××という言葉にとって代わられてしまったが、ひと昔前までは、

「あの子は、××小町娘」

などとよく言ったものである。

ではなぜ「小町」は美女なのか、というとその起源は平安時代にさかのぼる。そのころ美女としても歌人としても有名な小野小町という女性がいた。「百人一首」に、

花の色は移りにけりないたづらにわが身世にふるながめせしまに

という歌を残していることはご存じの方も多いと思う。彼女については、深草少将が、毎夜通いつめ、くどきにくどいたが、遂に首を縦にふらなかったという伝説もある。そうしたエピソードが、いよいよ彼女を神秘化し日本の美女のナンバー・ワンにまつりあげてしまった。後世「小

町」といえば美女の代名詞になり、「深川小町」「葭町小町」などという言い方が生まれるのだが、しかし、平安朝の戸籍をのぞくと、意外なことを発見する。

たとえば、「平安遺文」に収められている寛弘元年（一〇〇四）の讃岐国入野郷の戸籍を見てみよう。おもしろいことにここには、小町に似た名前がずらりと並んでいる。

例えば、額田部並山という人の戸籍には、

額田部乙町女　三十一歳
秦糸町女　四十三歳
日下部今町女　三十歳
山口石町女　六十六歳

などというのがあるし、ほかにも、

帯町女
満町女

とあって、ついに、讃岐茂有という人の戸籍に、

伊西部小町女　十六歳

が登場する。このほか有町女、吉町女とか、ひどいのには町屎女などというのもある。大体「町」の下に「女」がつく場合が多いようだ。この「平安遺文」は現在残っている平安朝の文書を集録したもので、この時代を研究する学者にとっては大変貴重な史料集である。

じつをいうと、私は別のことに利用させてもらっている。平安朝を素材にした小説を書くとき、この戸籍から名前を拝借するのだ。ずっと以前に書いたものの中に登場する「阿古女（あこめ）」という女は、この讃岐（さぬき）の戸籍の中からとった。

余談はさておき、この町女チャンの行列を見ていただきたい。してみると、何町女というのは、どうもこのころのありふれた名前らしいのだ。それがいつのまにか美女の代名詞になったことを、彼女たちが冥土（めいど）で知ったら、どんな顔をするだろう。

「そいつはありがたいねえ」

というだろうか。あるいは、

「そうとも、私だって美女でしたからね、エヘン」

というかもしれない。女はいつの世にもうぬぼれの強いものだから。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com